

## 信者の「中間状態」についての一考察

間島直之

### 序

死についての問題が人間の存在と生活の全般に於いて根源的な事柄であることについては論を待たない。現代でもこの問題はすぐれて社会的な問題である。最近の私たちのまわり、日本の国内を見てもいわゆる臨死体験についての話題が流行し、また臓器移植の問題とかかわって、そもそも「死」とは何なのか様々に論じられている状況である。

その中で私たちキリスト者は、聖書が揭示する「死」について正しく理解し、語ることが求められている。聖書外の観念や異教の思想ではなく、真に釈義的な作業を通して得られる知識をもってしっかりと立つことが求められる。それはこの世に対する弁証とともに誤った聖書理解に対する正しい批判をも要求する。

このような認識に立つて、本稿では信者の死後の魂の状態に関して、「中間状態」の教理の全般を叙述することを目的とせず、特にローレン・ベットナーの所論を中心に考察する。また、不信者の「中間状態」、信者・不信者の「最後の状態」に関しては言及されない。本稿に於いては考察の対象を新約聖書に限定し、「キリストのよみへの降下」については取り扱わない。

## I. 「中間状態」の存在について

### 1 「中間状態」否定論？

「中間状態」という表現は聖書の中には現れないが、このように呼ばれる状態が存在することについては、教理史上でも教父時代、中世、宗教改革を経て現代に至るまで、多くの神学者によって認められてきた。もちろん、今日の教会もこの教理を告白している。たとえば、ウエストミンスター信仰基準に見られる告白はその最も代表的なものの一つであろう。

しかし、前世紀からこの教理を否定する見解がいくつか現れている。Hoekemaの紹介するPaul Althausの反論<sup>1)</sup>は、以下のとおりである。

すなわち、「中間状態」の教理は体のない魂が独立して存在することを前提としているが故に退けられるべきであり、この考えはプラトン哲学の色合いを持つものである」と述べる。また、彼はさらにもいくつかの理由を上げる。「この教理は魂が死を無傷で通り抜けるように見えるところから、死の重大性を正しく扱っていない」「体のない状態で人間が全く祝福されるということを行うことによって、体の重要性を否定している」「この教理は復活の意味

を無にする、なぜなら死後の祝福を得れば得るほど、終わりの日の大切さを減少させるからである」「この教理に従って、もしも死後の信者がすでに祝福され、悪しきものがすでに地獄にいるなら、どうして裁きの日が必要なのだろうか」「この教理は全く個人主義であって、他者との交わりよりは個人的な種類の祝福を含み、世界のあがない、紙の王国の到来、教会の完成は無視されている」 Althausはこれらを要約して、「中間状態」の教理は魂と体、個人と集団、祝福と終わりの栄光、個人の運命と世界の運命というそれぞれに一つのものを切離してしまうものだ」と言う。

Althausは終末論の諸要素の思想的な関連・構造の中での「中間状態」の教理の妥当性ということを専ら論じているように見える。確かに、「中間状態」の教理が過剰に強調されるならば、そこに彼の指摘しているような個人と集団」、また一個人の運命と世界の運命」との間の緊張関係が生ずるようにも考えられる。

しかし、真に問題とするべき事柄はまず第一にこの教理の聖書的な裏付けであって、真に聖書的な根拠のある教理であるならば、他の教理とのバランスという視点ゆえに退けられるべきものではないと言えないだろうか。もしも聖書が何らかの明らかな証拠によってこの教理の正当性を証言するなら、他の教理ないしは聖書におけるより大きな強調点との調和は、その後には検討されるべきであろう。

このような理由で、Althausの論の大半は「中間状態」の存在そのものに対する反論とはなりえないと考える。しかし、ここで一つ検討に値することは、上述のAlthausの反論の第一点である「体のない魂の存在」という主張はプラトン主義である（したがって聖書的ではない）という主張である。

Althausが言うように、体を失った魂が死後に存在するというのは聖書の主張と違うものであり、プラトンの哲学の影響のもとに生じた聖書外思想であって、聖書が体のない魂だけの存在を認めていないなら、「中間状態」

の教理はあやしいものとなる。

2 魂の不死性についての二つの意見

まず、「魂の不死」について二つの立場を検討する。

(1)「魂の不死」を否定する見解

オスカー・クルマンはその著書「靈魂の不滅か死者の復活か」<sup>44)</sup>の中でこの問題を扱っている。彼は、「靈魂の不滅」の思想はギリシャ思想に由来するものであって、聖書のものではない、とする。ギリシャの思想にあつては死は靈魂に自由を与える「友」であるが、聖書は死を「最後の敵」としており、この敵が滅ぼされることによって達成されるからだのよみがえりということこそ教えの中心としている、と言う。この復活の強調は「靈魂の不滅」とは相容れない。なぜなら「イエスが完全にまた真実に死んだ後に、からだと靈魂とを備えてよみがえつてこと」がキリスト教の宣教だからである<sup>45)</sup>。

また、「新約聖書における死と永遠の生命とが、いつもキリスト教の出来事と結びついていることを認めるなら、そのとき明らかになることは、最初のキリスト者たちにとって、靈魂は、本質的に不滅ではなくて、むしろイエス・キリストの復活を媒体として、また、キリストを信じる信仰を媒介としてのみそうなるということである<sup>46)</sup>、と言う。

G.C. Berkouwerは、「魂の不死」が独立した教理として聖書で主張されていない点では、クルマンに近い意見であるように見える。彼は「どのような状況にあつても死をもつともせず生き残る、人の一要素としての不死はもちろん、人と生ける神との関係から極めて離れて考えるようなものとしても、聖書は決して独立した関心を

不死に抱かせないのである<sup>47)</sup>。と言ひ、ギリシャ的な意味での魂の不死の思想は聖書の思想ではないことを論じている。

(2)肯定する見解

ローレン・ベットナーは、魂の不死の教理は聖書が教えているものであるとして全面的にこれを擁護する。

彼は、魂の不死の思想の信頼できる知識は聖書の中に見出されるとして、以下のように述べる。「一般に聖書は、魂の不死の問題を、神の存在を扱うのとほとんど同じような態度で扱っている。すなわち、そのような信仰は否定することのできない公理として考えられている。われわれの本性の特質が永遠不変のものであり、われわれが知性・愛情・良心・意思を持ちつつけるだろうということは、当然のこととして考えられる」<sup>48)</sup>。

彼は、魂の不死という概念は人間すべてにいけば本能と同じように与えられている生得概念である<sup>49)</sup>とし、「神の正義が立証されるためには、来世はなければならぬ」と語り、この世界のあらゆる悪や不正が正当に裁かれ、正しいものがふさわしい報いを受けるためには全ての者に魂の不死がなければならぬ、とする。彼は全ての人間の魂に死後も変わらずに意識を伴った存在があると考えている。

彼がこのように論ずる根拠の一つは聖書にあり、それについては別の角度から論じられなければならないが、それとは別に、古代の他の宗教に同様の思想があることや、社会一般においても人々の関心を集めていることを根拠として上げているのは適当でない。また、上に述べたように彼が倫理的な「要請」から魂の不死を考えているのは、カントの哲学に見られる人間論的樂觀論とも一脈通ずるものがあると考えられ<sup>50)</sup>、聖書の教理を論ずる順序として正しくないと考える<sup>51)</sup>。

### 3 新約聖書の不死への言及

聖書は、肉体とは区別された魂だけの不死という概念を持つているのだろうか。もしもそうならば、この思想はギリシヤ哲学のものであるとするA. J. A. Richardsやクルマンの見解は訂正されねばならない。

まず聖書が直接に「魂の不死」を語っているかどうか調べられるべきであろう。

(1) *ánatáta* これは、新約聖書に3回現れているが、新改訳ではそれぞれ1テモテ6:16で「死のない」、1コリント15:53-54で「二度「不死」と訳されている。

これらの箇所を見た限りでは、聖書が人間の魂の不死性に言及しているとは考えられない。なぜなら、本質的な不死性は神についてのみ言われており、信者に対して不死は語られるがそれはキリスト再臨時に変えられるからだの性質についてである。ここからは魂の不死に対する直接的な思想はうかがえない。

では、新改訳1コリント5:53で「朽ちないもの」と訳される *ánápatáta* ではどうだろうか。この語は新約聖書中に7回用いられていて、ローマ2:7、11テモテ10、エペソ6:24、1コリント15:42、50、53、54である。これらのうち、1コリントでの用例は信者のからだについての言明であるが、他の箇所も含めていずれの場合も明確な表現として「魂の不死」については言われていない。

(2) *ánápatáta* *ánápatáta* の形容詞形である。この語も新約聖書で7回使用されている。それらはローマ1:23、1コリント9:25、15:52、1テモテ1:17、1ペテロ1:4、23、3:4であるが、いずれの箇所にも信者の魂が不死であるとの言及はない。

以上のことから、聖書は明確な「魂の不死」という表現を用いていないことがわかる。この限りにおいて、聖書は独立した主題としての（その意味でギリシヤ的な）「魂の不死」の思想を表してはいないと考えられる。

### 4 聖書の根本的な人間観

それでは、聖書はそもそも人間の魂についてどのように語っているのだろうか。ここでは創造の時点に遡って人間の神への依存性と全人性ということをした。

聖書の示す人間の理解の最も根本をなす概念は、言うまでもなく人間の被造物性である。人間についての理解はこの点を無視しては成り立たない。

しかしそのような被造物としての性質は、全ての動植物も所有しているものであるが、人間は、「神の造」(創世記1:26)を持つものとして、また他の被造物を治める「治世権」を与えられた(1:28-30)存在として、また神の直接の創造になる(1:26、2:7)ものとして他の被造物とは区別される。

しかしこれらの特殊性は、神と人間との関係の正常性とも併せて考えられねばならない。その関係は、創世記2:4-24から、(1)創造主である神の主権。(2)神と人間との主従関係。(3)神の保護と保持としての物質の供与<sup>10)</sup>。

このように、人間はその誕生と生存の全てに於いて神に依存した状態にあることがわかる。「いのちそのものも神の賜物として考えられ」、「息ないし霊をより高い、永遠的な原理としての魂と解釈することはできない」<sup>11)</sup>と考えられる。すなわち、魂もその存在の起源は神に有り、このような意味で聖書の靈魂観はギリシヤ的な靈魂観と異なっている。

次に、人間を構成するものとして一般に言われる「肉体」と「魂」の関係を考えたい。

創世記1:26-27で示されるとおり、人間は「神の像」を持つものとして創造された。このことは、Hoekemaによれば、次の二つの重要な意味を持つ。すなわち、(1)神を映す「鏡」としての存在であって、神は人間の創造のうちには御自身を見える形で地上に現されたということ、そして(2)神を「代表する」ものとしての存在であって、神の

意思をこの地上で実現する働きを担っているということである<sup>95</sup>。人間は「神の像」としての在り方を神との関係という哲学的な面だけでなく、その肉体をもってする活動に於いても期待されていた。その意味で人間は魂とからだを合わせて全人的に「神の像」を持つものと言えるだろう。

しかし、人間がちりから造られたからだだと、神の息との二つの部分からなっているのではないか、という疑問も生じる。このように人間をいくつかの構成する要素に分ける考えには、「からだと魂」との二つと見る考えと、「からだ、魂と霊」との三つに見る考えとがあった。しかし現在では、人間の内にとらだと魂という二つの異なる面を認めつつも、それらが有機的に相互作用をしつつ存在していると考えられる見方が有力である<sup>96</sup>。

また、上述の被造物としての人間の神への依存性ということ言えば、人間はその肉体も魂とともに神によって造られたのであって、創造者との関係に於いて全人的に依存する存在と言える。

このように、人間の存在の神への全き依存性からだと魂との統一性ということを考えてみると、神概念抜き魂の固有の性質としての「不死」、高貴な魂と牢獄としてのからだとを対比させて論ずるギリシャ的な概念は、聖書の人間観には異質なものであり、したがってギリシャ的な「魂の不死」の概念は聖書中では主張する余地がないと言わねばならない。

肉体の死後の魂の生存の問題も、神との関係において考えられねばならないことが明らかである。

#### 5 魂の死後の存在を示唆する聖書の証言

次に、魂が肉体の死後にも存在することを示唆する箇所をいくつか検討する。

(1)まず、新約聖書中で「魂」と訳されうる *psyche* について考える。この語は、肉体的な意味での地上のいのちをも

意味するが、いのちの中心としての「魂」も意味する<sup>97</sup>。

マタイ10:28では次のように言われる。「からだを殺しても、魂 (*psyche*) を殺せない人たちが恐れてはなりません。そんなものより、たましい (*psuche*) もからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。」ここでは、*psyche* は「からだ」とともに人間の一部分をなす部分として言われている。また、文脈は迫害についてであり、「からだ」は人によって滅ぼされうるものとされている一方で、「たましい」は人が触れることはできないが神はこれを滅ぼすことができると言われている。ここでは「たましい」は生き延びうる性質を持っているが、神によって滅ぼされうるものであることが前提とされていると思われる<sup>98</sup>。

黙示録9:6では、次のように言われる。「…私は、神のことばど、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましい (*psuche*) が祭壇の下にいるのを見た。」ヨハネが見た幻は、地上で肉体のいのちを殺された殉教者であつて、かれらはその肉体を離れて魂のみの状態で置かれていたことがわかる。続く11節では、その魂に向かつて「…もうしばらくの間、休んでいなさい。」と言われている、この状態がある期間継続するものであることと、完成を待つ仮の状態であることが示唆されている。

同様に、20:4では、「…また私は、イエスのあかしと神のことはとのゆえに首をはねられた人たちのたましい (*psuche*) と、…を見た」と言われる。ここでも言われているのは信者で、しかも地上の肉体のいのちを殺された者たちである。そして体のない魂のみが語られている。しかも、これも最後の状態ではない。

(2)「霊」と訳されている *neuma* という語の用法にも、からだを離れた独立した存在の状態を示唆する箇所がある。ルカ22:46では、主イエスが十字架上で息を引き取られる際に発した「父よ。わが霊 (*neuma*) を御手にゆだねます。」という言葉がしるされているが、これは肉体の死後にもなお生きて存在する「霊」があることを言っ

いると考えられる。使徒2:26でステパノが殉教の死の間際に言った言葉、「主イエスよ。私の霊 (ruelua) をお受けください。」にも同じ事が言えるであろう。また、ヘブル2:25では「全うされた義人たちの霊 (ruelua)」が天において存在している、と語られている。

このような箇所では、信者の魂は体の滅んだ後も存在するものであることが言われている。

(3) 聖書は死後の魂が行く「場所」についても語っている。新約聖書でハデス (hadus) と言われているものがそれである。新約聖書でハデスは10回用いられている。ヘンドリックセンはこの語の意味をルカ15:22、24から「苦しみと炎の場所」と理解する<sup>28)</sup>。しかしハデスには死の力を表していると考えられる表現 (マタイ5:18) があるほか、使徒2:27、31や、また黙示録での用例 (1:18、6:8、20:13、14) は最後のさばきに先立つ死者の存在の場所を指していると考えられ<sup>29)</sup>、ここは祝福の場所ともさばきの場所とも言えないと思われる。

しかしヘンドリックセンの指摘するルカ5:23、24での用例からは、ハデスが不信者にとつての苦しみ場所という一面を持つことは導き出せるかも知れない。

以上の概観から、聖書はからだの死後に魂が独立して存在することを確かに証言していると言える。したがって、私たちはギリシヤ的な「魂の不死」という思想はとることができないけれども、肉体の死が魂の死をも意味するものではない、と言わねばならない。

## II. 「中間状態」における魂の「意識」について

前章において、聖書はキリストにあつて救われた者は死後も魂が何らかの形で存在すると言っていること、また

死後の領域というものが存在すると語っていることを見た。では、信者の魂は死後、肉体を離れてどのような状態に置かれるのだろうか。

### 1 ローレン・ベットナーの見解

Iで取り上げた彼の著書「不死」は、聖書の語る死、不死の思想、そして「中間状態」についてわかりやすく解説をこころみたものであるが、この書の記述には多くの問題があると考えられる。

以下、「中間状態」における信者の魂の持つ「意識」の理解について、ベットナーの主張を整理する。

#### ① 信者の魂は「中間状態」にあつて、進歩発展を続けるという理解

「……また、彼自身、そのうちには、全く予想もしなかつた何千という新しい才能と力の花が開きはじめるであろう。これは次第に発展し、成長し、永遠に彼のものとなるのである。」<sup>30)</sup>「一天の生活は、何物にも邪魔されることなく進歩し、常に向上し、前進する。」<sup>31)</sup>「知性は肉体の死にあつても、その能力や知識を少しも失いはしない。それどころか、知性は今までよりもはるかに高い存在の段階に入るのである。第一の直接的結果は、魂がこの世の限定から解放され、罪の最後の痕跡をぬぐわれて、その知性かつ霊的機能の高揚を知り、前よりも一層生々と活発になることである。」<sup>32)</sup>ベットナーはこのように記し、その理由として、次の諸点を上げる。

- (1) 人間は考える知的な存在である。
- (2) 人間は善悪の判断力を持った道德的な存在である。
- (3) 人間は人間が本来そう造られて、贖罪が完成される時にそうなるように、神聖である。
- (4) 人間は不死で永遠に生きる魂を持っている。

(5)人間は彼よりも下等な被造物の支配者である。

そして、これらの性質のゆえに一人間は現世や中間の状態にいる間だけではなく、どこしえにその知識と知恵が発達し、力を増しつづけるようになった。」<sup>(8)</sup>と述べる。

②「中間状態」にある信者は地上の出来事を見聞きする、という理解

ベットナーは、つづいて「全知性」とも言える知覚を信者の魂が獲得すると述べる。「すでに中間の状態に移されて、現在そこにいる人々は、この世の出来事を、あるいは直接に見、あるいは神や天使の啓示により、あるいは、彼らより後に死んだ人々を通じ、引きつづき知っているということは確かである。この世において、世界のどこで起こった事件でも、どこにいようと、直ちに聞いたりできる。電話とかラジオとかテレビジョンなどの純粋に機械的な手段による能率的な伝達方法があるからには、より高い国では、伝達がわれわれのこの世で知ったものより一層直接的で能率がよいということは、疑う余地がないのである。」<sup>(9)</sup>

以上二点のベットナーの主張に共通する問題点は、聖書の解釈を基盤にした議論が欠けていることであり、むしろ進歩・発展といった観念によった類推的な考察に頼っていることである。以下、ベットナーの理解の支えとなっているいくつかの前提について順次考察する。

## 2 予備的考察(1)「パラダイス」の理解について

「中間状態」における信者の魂の意識について扱う前に、「パラダイス」 *paradeisos* という語の理解について考察したい。

ベットナーは「パラダイス」は「天国」と同一である、とする。すなわちルカ23:43に言及し、「信者が中間の状態にある」ということを論じた文脈で言われている。「またⅡコリント12:2-4から「これは、パラダイスと天国とが同一のものであることを示している。」<sup>(10)</sup>と言う。これらは中間状態が、ある意識を伴った状態であるということを示した文脈で言われている。

疑問に思われる点は、「パラダイス」と「天国」とを同一とすることで中間状態と「天」すなわち新天地とを同一視しているように見受けられる点である。ベットナーにあつては、少なくとも魂の状態に関して中間状態と新天地の間には区別はないものと考えられている。

次に「パラダイス」が何を指しているかを検討する。この語は新約聖書中に3回しか現れない。

### ①ルカ23:43

これは主イエスが十字架上で、あわれみを願った盗人に対して語られたものである。盗人は主に「御国の位にお着きになるときに」に自分を思い出してほしいと願ったのに対し、主は盗人に、自分と共にパラダイスにいることが「きょう」実現する、と言われた。そこでこの「きょう」を文字通りにとらずに、「メシヤの救いの業がおこなわれる時を指す技術的な表現であり、ここではイエスの復活に於ける高峯の時を指している」<sup>(11)</sup>とする理解もあるが、信者の魂が死後に復活までの間にも存続するという理解を前提とすれば、「きょう」をキリストの再臨の時とする必然性は薄れると思われる。むしろ盗人の願いに対応した主の約束であるということを考えれば、「きょう」は「死後直ちに」という意味であるとするのが自然ではないかと思われる。

また、ここで「わたしとともに」 *met' eivou em* とあるのは、ただ単に「わたしといっしょに」ではなく、私と共有する、の意であると言われる。主の約束は、死後に於いてただ祝福の場所にいることだけではなく、それを約束された主御自身と親しく、近く交わることを意味していたと考えられる。これは、新約聖書中ではしばしば死後

の状態が「キリストと共にいる」こととして語られていることと一致するように思われる<sup>99</sup>。

このように見ていくと、ここでの「パラダイス」とは信者の魂が死後直ちに入るキリストと共なる祝福の状態を指していると考えられる。

② 黙示録2:7

これはエベソにある教会に送られた手紙の終わりの一節である。

ここにある「いのちの木」からは、創世記2:9で語られているエデンの園のいのちの木が連想される。人間は墮落後、園から追放され、いのちの木から遠ざけられた。しかし、一終わりの時に信仰を貫いた者たちがこの象徴的な永遠のいのちの源に近付くことを許されるというのはふさわしいこと<sup>100</sup>、人間は、神の救済の業が完成するときに神のエデンに回復されると考えられる。「パラダイス」は、ここでは終わりの日に神のあがないの業の完成として天から下ってくる天のエルサレムのことを言っていると考えられる<sup>101</sup>。

③ IIコリント12:4

この箇所パウロは自らの神秘的な体験を三人称で語っている。ここで言われている「パラダイス」は2節で言われている「第三の天」と同じものと考えられる。ここでは一人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことは「<sup>102</sup>」が聞かれ、そこは地上に住む人間の与かり知ることのできない世界である。この奥義的説明からは、そこが神の領域に属する所であると言うにとどめるべきであろう。ここでは「パラダイス」が「中間状態」なのか、あるいは何らかの神的領域なのかははっきりと言うことはできない。

以上の考察から、「パラダイス」は文脈によって決して一つの意味ではなく、「中間状態」と終わりの日の新天新地とを表す表現と見てよいだろう。したがって、ベットナーの言うような「パラダイス」と「天国」との同一視は

できないし、「中間状態」を「天国」の状態と同一視することもできないと考えられる。

3 予備的考察(2)ルカ16章「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ」について

ベットナーは「死後の魂の眠り」という教理について反駁している文脈の中で、この「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ」を取り上げている。

「金持ちの男とラザロの話は、中間の状態について非常に多くのことを語っているので、われわれは、たびたび引用する必要があると思うのだが、…そこでわれわれは、救われた者と救われなかった者の死んだ直後の姿を見ることができるのである。ラザロは、アブラハムの胸、つまりパラダイスにあり、金持ちの男は、黄泉にいた。二人とも充分目覚め、意識をもっていた。アブラハムと金持ちの男は、お互いに相手が分かった。また彼らは、言葉のやりとりをしている。…これはほんのたとえ話にすぎないと反対するのは、よいことではない。というのは、イエスの話されたこの話は、人生にとって真実なことであり、現実に基づいたものであるからだ。…」<sup>103</sup>

ここでベットナーは、死者の魂が中間状態にあつて眠っている状態にあるのではないということ論じながら、このたとえ話の金持ちとラザロとの有様はそのまま私たちの死後の状態、また意識の状態を示していると語る。つまり、死後の魂は単に自分の置かれた状況についての理解を持つにとどまらず、互いに相手を認め、言葉を交わすことすらできる、との理解である。先にベットナーが「中間状態」にある魂は地上のことを見聞きすることができると理解していることを問題点として上げたが、このような理解はこのたとえ話の解釈にいくぶんか由来しているようにも考えられる。

しかしここには解釈の方法上、問題があると思われる。一般的に「たとえ話」の解釈に当たっては、その「たと

え話」がどのような文字的効果を持って「たとえ」を語っているのか、つまり「たとえるもの」と「たとえられるもの」との関係はどのようなものであるかが考えられねばならない。また、そのたとえ話は第一義的に何を言おうとしているのか、ということも考えられなくてはならない。それは、「たとえ話」は引合いに出された例についての何かを示すためにあるのではなく、たとえられた方にこそメッセージの中心があるからである。特に「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ話」に限って見れば、ここには「たとえられるもの」がなく、字義的な物語そのものの詳細に意味があるのではなく、物語の主旨目的、文脈から導かれる教えそのものに目的の中心があると考えべきであろう<sup>84</sup>。

それでは、このたとえ話の妥当な解釈はどのようなものだろうか。

まず、文脈の中でこのたとえ話の位置が考慮されねばならない。このたとえ話は19節以下だけで独立しているのではなく、14節から連続する状況の中で語られており、内容も一続きのものと考えられる。つまり、15節、17節の教えは19節以下のたとえ話に反映されているように思われる。すなわち15節での教えが25節のアブラハムの言葉の中に、17節に言われる、律法こそが聞かれるべきであるという主張は31節のアブラハムの言葉にそれぞれ表現されると考えられる。

そのように見ていくと、金持ちとラザロとの地上の生活が死後には全く逆転した状況になるということが、15節に言われていた人間の評価と神の評価との相違もしくは将来ありうべき逆転ということの例話として語られていると考えられ、同様に、確立された律法を守ることに、その権威を認めそれに従うようにという教えは、17節（および18節）と29～31節とで繰返されて語られ、しかも二度目には律法に聞き従うということの持つ重大性を例話をもつて強調しているように思われる。

そうすると、主イエスがこの場面で語られたことの要点は上に述べた二点であって、「たとえ話」はその主張を

より印象づける、ないしは強調するための例話と見ることができないだろうか。

したがって、このたとえ話の文脈から考えると金持ちとアブラハムとの会話の中で明らかにされる原則は、たとえ話に先立って15～18節で述べられたことの繰返さないし強調であって、死後の領域においてこれと同様の状況で会話が可能であるということの説明にはならないと思われる。

ここで中間状況について何かを言おうとすれば、それは「人間は死んだ後に行くところがある」ということと、「その行くところは祝福の場所か裁きの場所かのいずれかである」ということではないだろうか。このような理解が文脈からまたたとえ話の語られた目的から考えて妥当ではないかと思われる。

#### 4 「中間状態」にある信者の魂は進歩発展を続けるか

ペットナーの主張の検討である。ペットナーの論拠は、人間が「神のかたち」に造られているということであった。しかし、この主張は被造物としての人間存在の有限性と、「中間状態」に於ける人間存在の不完全さ、暫定性ということが無視していると考えられる。

すなわち、被造物としての人間存在の有限性ということでは、ペットナーの主張の(4)にある「人間は不死で永遠に生きる魂を持っている」ということはただ神の主権の下の服している限りに於いて言えるのであって、生来的な魂の性質が不死であるとかまたは魂が自立的に生きる存在であるとか言うことはできない。

神の主権の下に於いて不死であると言ったとしても、そのことは知識・知恵の限らない前進ということには必ずしも結び付かないと考えられる。

また論拠の(1)(2)については、人間に思考能力や道徳的な判断能力が備わっているとしても、その知恵は本質的に

地上において他の被造物を治めるために与えられていたのではなかっただろうか。論拠の(5)も同様であって、被造物の支配という務めは地上に於いて与えられていたものであって、そのまま「中間状態」の魂に適用できるかどうかは疑問である。

論拠の(3)は、「人間は本来一神聖である」と言うが、人間の被造物性に照らしていささか不可解な理由である。人間は他の被造物に対して優越し、神の代理として統治する務めを与えられていたとしても、神と人との間には厳然と区別がある。

また、他方「中間状態」の暫定性、そこに於ける人間存在の不完全さから考えれば、ペットナーはあまりに魂のみの存在の可能性を強調していないだろうか。言うまでもなく聖書の示す最終の状態は、黙示録21、22章に示された新天地の到来と神と人とが共に住む祝福の実現である。そこでは、人々はよみがえりのからだを持つた存在であり、決して魂だけの存在ではない。からだのよみがえりは単なる「回復」という性格のものではなく、Iコリント15章でパウロが語るようにキリストの復活によって確証された私たちの復活は信仰の確信であり、からだのよみがえりの時にこそ神の救済の業は完成する(54節)のである。

また、先に見たように、「パラダイス」という言葉が新天地にも「中間状態」にも使われているが、だからと言って二つを同じ場所と考える必要はない。

本稿の上では、からだを離れた魂が「中間状態」では単独で存在することを見たが、それは救われるべき人間の本来の在り方ではなく、あくまで救いの完成に至る途上の姿と言えるだろう。「中間状態」にある魂を未完成の、また不完全な人間存在の形態とするならば、そこでは人間の本来持っている可能性、能力の点でも何らかの制限ないし限界がある、と考えられないだろうか。人間はその創造の時から、神から与えられた務めを果たすために肉体

を与えられていたのであり、神の意図に於いて肉体の存在は人間の不可欠の要素であった。「中間状態」にある魂はその肉体を奪われた状態にあるのであって、少なくとも初めに神の意図された正常な人間の諸活動は制限された状態にあるのではないだろうか。

黙示録「一」はこのような考えを示唆すると思われる。「御霊も言われる。『しかし、彼らはその労苦から解放されて休むことができる。彼らの行いは彼らについて行くからである』。これは最後のさばきを待っている死者について言われていて、彼らは「休む」と言われている。

この話はたとえばマタイ福音書やマルコ福音書などで疲労の故に休息するという意味で用いられるが、ここでは死後の魂について言われている。それは、死が地上の労苦の終わりを意味すると同時に、死後の状態が静かな休息の状態にあるということの意味していないだろうか。この後は黙示録「二」でも同様に死後の魂について言われている。この言葉の持っている意味からは、少なくともペットナーの言うような「生々と活発になる」魂の在り方は考えられないのではないだろうか。

ペットナーの主張の問題点は、彼の議論が彼の言う「神のかたち」から導き出されるものであって、それは「中間状態」に関連して言われている聖書の箇所からの証明を持っていないということにある。彼は明確に根拠を上げてこのことを論ずるべきであったと思われる<sup>(3)</sup>。

5 信者の魂は「中間状態」にあつて地上の事柄を見聞きするか

ペットナーの第二の問題点である。しかし、このことを主張するペットナーの根拠は明らかでない。「確か」、また「疑う余地はない」と言っていることに、残念ながら根拠が示されていない。

しかし、予備的考察、また前節での検討で見たように、「中間状態」は新天地と区別され、決して人間が完全にされる所ではないということ、ベットナーが「中間状態」の理解の一つの基礎としていると考えられる「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ」も字義的には理解できないということ、これらの理解から、ベットナーの主張するところの人間の魂の知識について考えたい。

まず、「この世において、世界のどこで起こった事件でも、どこにいようと、直ちに見たり聞いたりできる」と言われていたことについてはどうだろうか。

人間は被造物であるということは神との区別性、人間の有限性を意味する。しかし、ベットナーがここで考えている知識というものは、神の持っている知識の在り方に似て本来の人間の有限な知覚を超えている。ベットナーは魂の進歩発展を論じた中で、魂は「中間状態」でますます活発になるとしたが、これについては存在の不完全さという視点から先に否定した。ここでも同じ点から疑問を呈することができるように思う。すなわち、本来からだ魂とを持って一人の人間として在るべきところ、「中間状態」にある人間は中途半端な状態にあり、本来あるべき姿に照らしても人間としての存在は制限された状態にあると考えるべきであって、人間の能力を超えたような知覚の発達などは考えられないのではないだろうか。

「この世のラジオ、テレビジョンなどよりもはるかに能率の良い伝達方法がある」などとする考えは一体どこから出たものであるか。ここにはもちろん「中間状態」に於いて魂が休むという考えは無いことがわかるが、それだけでなくベットナーには地上のからだやからだをもって接する世界と、霊的な存在の次元とを連続させる短絡さがあると言えないだろうか。

しかし、それらにもましてベットナーの主張の決定的な欠陥は聖書の証言を欠いているということである。ベットナーが言うような地上のあらゆる事柄についての知識などは聖書には記されていないと言わねばならず、ベットナーの主張は憶測の域を出ないものと言わざるを得ない。

併せてベットナー以外の同様な主張も見ておきたい。その一人はヘンドリックセンが引用するクラレンス・E・マッカートニーである。彼は、ヘブル書11以下箇所を扱った説教の中で、次のように言う。「死人が私たちを見ていて、この世で私たちのしていることを知っていることが、この節から十分推論できるように思える：死んだ人々がこの世の私たちの生活を観察しているという考えに、私はほとんど疑問を持つていない」<sup>90</sup>。また、日本人では笹尾鉄三郎がヘブル書11の注解でこう言う。「我らの周囲には前章の信仰の勇者を初め何万人の信仰者が見物して応援してくる。…彼等の中にはベテロもパウロも居り、上から我等を見ているのであるから、我等は懸命に走らねばならない」<sup>91</sup>。

しかし、これらの解釈には誤りがある。ここで、私たち信仰者を取り巻いていると言われている「証人」という言葉は、たしかに「見物人」との訳も可能な語であるが、「文脈は走る者たちが彼らを見ることであって、彼らが走る者たちを見るのではない」<sup>92</sup>。さらに「証人」とは、私たちについての証人ではなく、「真実と忍耐により、信仰の生活が可能であることを証言する」<sup>93</sup>者たちと理解すべきであろう。このような解釈によれば、死後の魂が地上の私たちを見ているという理解の余地はないと考えられる<sup>94</sup>。

### Ⅲ. 「中間状態」への希望

以上、死後の「中間状態」に於けるの信者の魂の状態について若干の考察を行った。ここで確認できることは、

聖書が確かに「中間状態」の存在を語っていることだが、そこでの魂の在り方については多くのことが明らかでない。私たちはピリピ1:13やⅡコリント5章のパウロの言葉から、中間状態でキリストと共にあることが地上の生よりも「はるかにまさって」いて、私たちはそこで明確な意識を持ってその状態を喜び楽しむことができる。しかしパウロも、「どのようにして」そこに存在するのかは語らない。キリストと共にいることを許されていないのであろう。この状態をこれ以上詳しく想像することも、私たちの許された知識の範囲を超えることなどではないだろうか。

このことは、「中間状態」について教えることを神はむしろ望んでおられず、それよりもキリストの再臨とそれに続く私たちのからだのよみがえりにこそ強調があることを示していないだろうか。私たちの救いは新天地において、また新しい栄光のからだを与えられることによって完成するからである。

しかしながら、「中間状態」の教理は私たちにとって重要である。キリストにあつて死んだものは、決して忘れられたのではない。私たちは「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のもの」(ローマ14:9)だからである。さらに、肉体の滅びの後に、私たちは「神が人と共に住む」という新天地での約束を先取りすることが許されている。死は決して終わりではない。なぜなら「死も、…どんな被造物も私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできない」(ローマ8:38,39)からである。

死は、キリスト者にとって真の住まいへ帰ることでもある。今は地上の生にあつて主から離れている私たちも、死に際してキリストのもとに迎えられるのである。

「主の聖徒たちの死は主の目に尊い。」(詩編116:15) 私たちは、キリストにある私たちを死の時にみもとに引

き上げて下さる主に信頼し、この生を歩むものでありたい。

注

- (1) 本稿は、東京基督神学校の1961年度卒業論文として提出したものに若干の修正を加えたものである。
- (2) すなわち、ウェストミンスター信仰告白32章、同小教理問答問37、同大教理問答問98。
- (3) A.A.Hoekema, *The Bible And The Future* (Grand Rapids: Eerdmans, 1979) pp.93-94, Paul Althaus "Die Letzen Dinge"からの引用。
- (4) 岸千年、間垣洋助訳、東京、聖文社、1966年。
- (5) クルマン、前掲書、p.44。
- (6) クルマン、前掲書、p.17。
- (7) G.C.Berkouwer, *Man: The Image Of God* (Grand Rapids: Eerdmans, 1962) p.276
- (8) Loraine Boettner, *Immortality* (Grand Rapids: Eerdmans, 1956) p.78。引用は尾山令二訳「不死」(東京、新教出版社、1957) p.115。本稿での引用はすべて同書に基く。
- (9) Boettner, p.71。引用は前掲書、pp.104-107。
- (10) Boettner, p.64。同上、p.94。
- (11) カント、波多野・宮本共訳「実践理性批判」(岩波文庫、1948) pp.183-5。
- (12) 同様の議論で人間の魂が不死であるとするものはいくつか見られる。たとえば L.Strauss, *We Live Forever*

- (New York: Loizeaux Brothers, 1947) pp.26-28は根拠をエジプト、アフリカ、北米のインディアンたちの伝説に求めたもの。また、S・D・ローゼン、山田和明訳「人は死んだらどうなるか」(東京、いのちのこども社、1963) p.118は不信者の裁きについて、論理的な要請から「魂の不死」について論じている。
- (13) 服部嘉明「旧約聖書神学・講義用シラバス」(東京キリスト教学園、1990)に於て。
- (14) E・C・フリーマン、田中、木田訳「旧約聖書神学概説」(東京、日本基督教団出版局、1969) p.281。
- (15) A.A.Hoekema, *Created In God's Image* pp.66-68.
- (16) エドモンドフリーマン、前掲註、p.281、G.E.Ladd, *A Theology of The New Testament* (Grand Rapids: Eedmanns, 1974) p.457を参照。
- (17) Colin Brown ed., *The New International Dictionary of New Testament Theology* (Grand Rapids: Zondervan, 1975) pp.682-83及びW.F.Arndt, F.W.Gingrich, *Greek-English Lexicon Of The New Testament Second Ed.* (Chicago: Univ Of Chicago Press, 1979) pp.893-94
- (18) J. Osei-Bonsu, "The Intermediate State In The New Testament", *Scottish Journal of Theology* Vol.44 (1991), pp.169-94, A.A.Hoekame, *The Bible And The Future*, 各々の見解を参照。
- (19) 旧約聖書のシエオルについてはいくつかの著書に於て考察している。シエオルの釈義的検討については、*Exegetica* 5 (1994) の前掲論文を参照のこと。
- (20) ウェリアム・ハンケリックセン、鈴木英昭訳「死後と終末」(名古屋、いのちのこども社、1983) pp.115-16
- (21) J.Jeremias, "gōnyc", G.Kittel, G.Friendrich, eds., *Theological Dictionary Of The New Testament*, 10vols. (Grand Rapids: Eerdman's, 1964-74) I, p.148

- (22) Boettner, p.43、引用は前掲註、p.64
- (23) Boettner, p.92、同註、p.136
- (24) Boettner, p.94、同註、p.138
- (25) Boettner, p.94、同註、p.138
- (26) Boettner, p.95、同註、p.139
- (27) Boettner, p.92、同註、p.134-35
- (28) E.E.Ellis, *The Gospel Of Luke* (The New Century Bible Commentary; Grand Rapids, Eerdman's, 1974) pp.268-69
- (29) A.Plummer, *Gospel According To St. Luke* (I.C.C. Edinburgh, T&T Clark, 1922) pp.535-36
- (30) エンケ14:2-3、マタイ1:21-23を参照。
- (31) R.H.Hounce, *The Book Of Revelation* (N.I.C.; Grand Rapids, Eerdman's, 1977) p.90
- (32) G.E.Ladd, *A Commentary On The Revelation Of John* (Grand Rapids, Eerdman's, 1972) p.41
- (33) Boettner, p.112、引用は前掲註、p.166
- (34) たんき語の文学の種類について、G.B.Caird, *The Language And Imagery Of The Bible* (Philadelphia, Westminster Press, 1980) p.163を参照。
- (35) この点に関して筆者は以下のVosの意見に賛成する。「しかしながら、聖書の示唆するところは、全体としては「中間状態」に於けるあらゆる種類の進歩に反対しているように見える。むしろ、それは中間の静的な状態を表している。人間の正常な構造は人格の成長にからだを必要とするという事実から考えれば、からだに欠けていたということがこのことを示唆するやうに見える。もしこのことが正しければ、聖書がキリスト者の希望

の対象として、すべての強調を中間状態よりも復活に置いているという事実を幾分かは説明するかも知れない。」J.G.Vos, 『The Intermediate State』, *Christianity Today*, Vol.2 (May 1958) p.13

(36) ヘンドリックセン、前掲書、p.77以下を参る。

(37) 笹尾鉄三郎「ヘブル書講義」(市川、クリスチャン文書伝道団、1957) p.263

(38) F.Hewitt, *The Epistle To The Hebrews* (Tyndale N.T.Commentaries; London, Tyndale, 1960) p.189

(39) F・F・ブルース、宮村武夫訳「ヘブル人への手紙」(東京、いのちのこゝろ社、1978) p.491

(40) しかし、このような誤った理解は一般のクリスチャンの間に広く存在する。身近な例として、「メッセージ」

「クリスチャン新聞・福音版」1981年11月号、「百万人の福音」1991年9月、pp.38〜45、「百万人の福音」1992年1月、pp.70〜3、尾山令仁「死への備え」(東京、いのちのこゝろ社、1973) p.82を参照のこと。